

## 国際開発ゼミ紹介

### 立命館大学経済学部：黒川清登ゼミ

わが国の大学の革新的な研究と教育の最前線の動向を読者に紹介するシリーズの新たな試みとして、開発途上国においてユニークな海外研修を実施している「国際開発ゼミ」を紹介する。  
(本稿は立命館大学経済学部の黒川清登教授に執筆していただいた。)

ゼミ教官名	黒川 清登
教育科目の名称	開発経済学と社会経済調査
学生の学年構成と人数	2回生 15名、3回生 15名、4回生 20名
海外研修に教官の同伴の有無	有
海外研修参加者の人数と必修か否か	5名、必修ではない
訪問する途上国の数	1か国 (タイ)
海外研修の期間	11日間 (2022年度：コロナ前は通常14日程度)
学生一人の平均費用	約20万円
大学からの財政支援の有無と有の場合の金額	有、約3万円 (2022年度) (コロナ前は約5万円)

#### 1. 海外研修の目的

名称：海外フィールドワークプログラム (英語で学ぶタイの地域開発とツーリズム) (2単位)

タイの地域開発の事例をタイ東北部のコンケン県を中心に英語で学ぶ。

タイ東北部のコンケン大学があえて選ばれた理由は、タイ東北地方がタイ国内では最も貧しく、日本の一村一品運動を参考に、2000年代初頭からタイ独自の OTOP (一村一品運動) 政策を推進するなど、農村・観光振興に取り組んでいるからだ。JETRO (2018) によれば、タイ東北部の一人当たり GDP は、バンコクの6分の1程度しかない。一方で、タイ東北部の生活は、途上国にありがちな貧民街ではなく、生活そのものは、相互扶助の精神に支えられており、むしろ、日本よりも幸福に思えるところが、学生には大きな刺激になっている。

#### 2. 海外研修の特徴・ユニークさ

- 1) 本プログラムは、タイ国立行政大学院大学 (NIDA) と国立コンケン大学 (KKU) の学生、先生方と共に、タイ東北部の農村を訪問し、なぜ彼らがタイの国内では最も貧しいのか、その抱える課題を明らかにしていく。
- 2) 研究対象は、①タイ OTOP 対象のグループ、②有機農業に取り組むグループ、③高齢者の自助グループ、としている。
- 3) それぞれの訪問先を、事前にウェブ情報などでタイの学生達と調べ、その上で現地インタビューを英語で行う。調査のポイントは、①日本の大分県を起源とする一村一品運動を

タイ側はどのように自分たちに適応させてきたか、②日本でも普及が難しい有機農業がなぜタイ東北では浸透しつつあるか、③日本では孤独死がしばしば起きるが、年金制度も満足でないタイ東北部で高齢者問題はどうか解決されているか、が重要なポイントになる。通訳はタイ語⇄英語で行う。

- 4) 最終日には、コンケン大学地域創生学部 (COLA: College of Local Administration) の学生、留学生に対し、英語で調査結果の発表を行う。タイ側は、タイで学んだ成果をどのように日本に還元するか等が議論される。日本側も日本の地域おこしの経験を事前講義で学び、タイに応用できる点は助言を行うが、今では、タイ側から日本が学ぶべきこと (例えば、相互扶助) の方が多くなっている。

### 3. 海外研修計画の策定方法

- 1) 毎年、6月より派遣前の事前講義を開始し、出発前までに我が国の地域おこしの経験も含め、計5回の講義を行う。これまでの成果を復習しながら、参加学生の関心に沿って訪問先、訪問したいグループの選定を行う。最終的には、タイ側の受け入れ可否も踏まえ、訪問先を出発1か月前には確定する。
- 2) 現地調査後は、タイで学べたことを2回の講義を経て整理し、調査完了報告書を各自が担当して執筆する。

### 4. 研修・研究テーマの策定とチームの編成方法

- 1) テーマの策定は、OTOP、有機農業、高齢者グループの3つを伝統的に堅持。
- 2) チームは、日本人2~3名に対し、タイ人学生も同数程度配置。また、タイのNIDAからは、院生をアドバイザーに各チーム1名を配置。日本側もタイ側も英語によるコミュニケーション力があることを前提に選抜しているが、語学力よりも、農村の課題解決に向けた熱意の方が重要である。

### 5. 研修・研究の方法論の策定

- 1) 方法論は、SWOT分析を中心に、訪問先グループの問題点のみならず、強み弱み (Strong、Weak)、機会・脅威 (Opportunity、Threat) を明確にする。これまで調査の基本、面談先概要、面談の相手方、時刻、場所などの行動記録を明確に残すことも教えてきたが、学生は良い面や悪い面ばかりを見る傾向があることから、相手方が置かれている客観情報を把握するため、SWOTを採用するようになった。英語ですべてまとめるという制約も考えると、このSWOT分析は短い時間で要点をまとめるのに非常に適している。
- 2) 訪問先については、スマホの位置・地図情報、高度計アプリ (東北地方はコラート高原に位置する)、インターネットスピード (スマホのネットスピード計測アプリ)、気候情報 (気温等) も記録させている。この結果、フィールド調査報告が非常に具体的になり、後々の学生にとっても事前学習が容易になった。
- 3) 簡易な土壌診断も実施。土壌酸性度計測計、電気伝導度計、土壌温度計などを持参し、訪問先での土壌の課題を探っている。多くの農場が有機農業に取り組んでいるが、酸性度すら計測していないことが多く、コンケン大学農学部などは、土壌診断にも一部協力している。経済学部の学生にとって、土壌温度、土壌酸性度などの計測は、初めてであるが、計

測の難しさ、誤差の発生など、経済統計の計測の誤差と似たような問題があることを気づかせることができている。

#### 6. 海外研修の段取りと手配の仕方（アポの取得、旅行の手配等）

- 1) 段取りは、タイのコンケン大学の企画立案がベースとなっている。同大学では、コンケン県を中心に広く町づくりへの参加、助言を行っており、それらの関係を活用している。
- 2) 手配の仕方もすべてコンケン大学を通じての訪問確認、車両手配を行っている。日本側からは、OTOP 関係、有機農業、高齢者問題の3つの領域を各2つ以上推薦してもらい、学生と共にその概要を決めて決定している。
- 3) 日本からタイまでの航空券は、大学が旅行代理店を通じ、例年3月ころには予約を確保している。

#### 7. 現地での研修・研究中の課題等（もしあれば：例 病気等）

- 1) 病気への課題：これまで食あたり、下痢などの症状を引き起こす事例は発生している。コンケン大学医学部付属病院のほか、私立のバンコックホスピタル（コンケン）を信頼できる医療機関として、点滴などに利用した実績がある。
- 2) コンケンに限っては、外国人訪問者も少なく、治安面の不安は殆どない。
- 3) 各学生には、現地で使えるSIMを事前に準備させ、スマホが使える状況にしている。（海外対応のポケットWi-Fiのレンタルを利用する学生もいる）

#### 8. フィールド学習の内容

##### （1）オーガニックグループへの訪問（2022年8月20日土曜日）

有機農業の推進は、滋賀県でも取り組んでいる重要課題であるが、有機農産品の生産は手間がかかり価格設定も高くなり、普及が進んでいない。しかし、有機農業でも、ハーブ類などでの応用は、日本でも成功事例があり、特にハーブ類に着目して選定した。このグループは、有機農業の推進の一環で、植林、ハーブ栽培、それらの活用に取り組んでいる。例えば、コロナ禍では、痛みを和らげるためのハーブの活用なども実習した。コロナ禍の日本でも、このハーブ類の癒し効果は着目されており、滋賀県甲賀市の地域振興策への応用が可能である。

学生からは、ハーブ類の効果は、大変興味があるものの、若い世代への浸透が十分でない、ハーブからの加工が難しいなどの意見が出た。これに対し、このグループのリーダーからは、若い人の来訪を増やすような工夫、大学との連携を深めるなどの回答があり、学生が望めば、インターンの受け入れも行いたいとのことだった。滋賀県甲賀市では、このハーブ類の活用のプロジェクトが進行しており、学生には、ハーブティーやアロマオイル抽出の試験事業にも参加を促す予定である。

Wanaphan  
Organic Garden  
at Ban Kong,  
Nong rue district,  
Khon Kaen



A fish doll  
with fragrance

Using charcoal  
made of trees of  
Sabanga



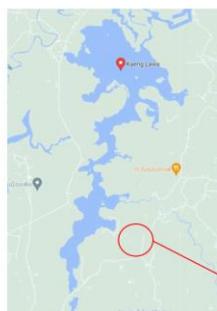
## (2) 養殖プロジェクトへの訪問 (2022年8月19日金曜日)

滋賀県では、長浜バイオ大学らがビワますなどの養殖試験を行っている。びわ湖の漁獲量が減少する中、養殖業の振興は不可欠である。コンケン県は、コラート高原の一部に属し、多くの湖がある。それらの周辺では、養殖事業による町づくりの取り組みを行うグループがあり、このグループでは、対象地域の塩害を逆手に取って、淡水湖では養殖できない魚類の養殖、販売に取り組んでいる。湖の塩分濃度が集中豪雨で大幅に変動することが懸念事項で、塩分濃度計、電気伝導度計などでの濃度管理が必要な状況であることが判明した。

学生からは、養殖に必要な機材の維持管理コストを如何に削減できるか、簡易な塩分濃度計などの活用ができるか否かが重要との指摘があり、リーダーからは、大学との連携を一層強めたいとのことだった。養殖は漁獲よりも安定的に思われがちだが、養殖でも集中豪雨などの自然災害をはじめ、組織運営上の問題があることが学生にとっては、驚きであったようだ。

## Fish Culture

Nong-kwan village, Muang Phia sub district



Workplace

14

### (3) コンケン大学での最終発表会 (2022年8月24日水曜日)



現地調査終了後は、大学内で打ち合わせを行い、その成果を英語で発表した。発表は、すべての訪問先について、活動グループの概要、課題を写真、地図も加え、SWOT分析テーブルに沿って取り纏め、英語で行った。日本人の学生にとって、英語で発表することは、タイに行く前には、相当のプレッシャーであったようだが、発表のころには、英語があまり得意でないことを気にせず、内容に注力し、意思疎通ができるようになったのは、なによりの収穫であった。

コンケン大学のフィールド調査に参加していない学生からは、それぞれのグループの取り組みと課題が具体的に理解できた、との評価を得た。同時に先生方から今回の成果を日本に持ち帰り、どのように活かしたいかとの質問があった。学生からは、国内では甲賀市信楽町の町づくりに取り組んでいることや、特にタイの相互扶助の精神を伝えたいとの回答があった。また、調査期間中に、同行してくれたタイの学生の積極的な対応に大いに刺激を受けたことに、感謝の言葉が贈られた。

## 9. 研修・研究の成果

### (1) タイの相互扶助文化の学び

出発前の日本人学生の多くは、タイを途上国と認識する。そして、日本の経験から何かしらの助言をできないか、を考えている。しかし、現地調査を進めるうちに、タイでは、敬虔な仏教思想に基づく、相互扶助が徹底されていることを学ぶことができた。既にタイの農村は若年層がバンコク等の都会に流出し、高齢化社会が到来している。年金制度も不十分な中、地域社会がコミュニティを形成し、自助努力を続けていることは、日本も学ぶべきと学生も理解していた。

### (2) 大学の地域創生への役割の学び

コンケン大学では、地域創生学部 (COLA) を中心に、地域のコミュニティと共に高齢化社会問題、有機農業の推進、地場産業の育成 (OTOP運動) に取り組んでいる。立命館大学のびわ湖草津キャンパスでは、地域連携課を設置し、地域経済の振興に組織的に取り組んでいる。特に黒川研究室では、滋賀県甲賀市との地域振興の連携があり、地域社会と大学の関係が密なことは、日本の大学にとっても学ぶべきところが多い。

### (3) 研究成果の報告・発表

学内ゼミナール大会、WEST論文大会 (学外の大学対抗論文大会) への成果の発表を行っている。我が国の高齢化社会問題などの解決にも通じる、タイでの成果は、学内でも高い評判を得ている。なお、2022年8月の成果は、本学HPでも公開されている。

### (4) 学生のフィールド学習の効果

学生にとってのフィールド学習の効果は、以下のような能力の向上にまとめることができる。

- 1) フィールド調査の企画立案力: 何をテーマにどこで、何が学べるか、ステークホルダーには

どのような人が考えられるか、事前講習では、これまでのフィールド調査報告書をじっくり読み、そこから新しい調査を企画することを学ばせている。特に途上国での調査といえども、ネット情報の収集分析が重要であること、訪問記録もグーグルマップで把握し、標高や天候情報なども収集させている。タイ語の情報もグーグルの翻訳機能を使えば活用できることなどは、新たな取り組みである。

- 2) インタビュー、質問力：このフィールド調査では、すべて英語で行われるため、事前に質問の仕方、インタビューのやり方を十分練習している。タイ側の学生も同様に事前に英語でのコミュニケーションを十分練習しており、タイの学生の勤勉ぶりから学ぶことは、参加学生への大きな刺激になっている。黒川研究室では、このアンケート調査票の設計から、SPSSを使った解析までを卒業研究に活かせるように指導している。
- 3) 調査資料作成能力：この調査では、各グループの良いところ、悪いところを両面で正確に把握するためSWOT分析を行わせている。強み (Strength) 、弱み (Weakness) は、内部要因、自分たちでコントロールできること、機会 (Opportunity) 、脅威 (Threats) は、外部要因として、コントロールできないこととして分析する方法であるが、英語での議論を行うため、非常に簡潔に議論をまとめるには大いに役立っている。
- 4) プレゼン能力 (英語) : この調査では、最後にタイの学生、先生方に英語でプレゼンを行う。これは学部生にとっては、緊張が強いられる経験ではあるが、タイの学生、先生方の楽しい雰囲気のおかげで、のびのびと実施できている。2017年には、タイとは別に、フィリピンのフィールド調査でも同様のことを行ったが、フィリピンの学生に対する発表は、英語力の格差が大きく、学生はかなり緊張した。タイの場合は、それほど英語力が無くても、気楽に良く話をすることができるため、日本人学生には、非常になじみやすい相手と言える。